明日への道しるべ

荒木新二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明日への道しるべ

【Ｎコード】
Ｎ６０４１Ｚ

【作者名】
荒木新二

【あらすじ】
ボクはもう“あの人”に会えない。

だから、ボクがみんなを守れるだけ強くなろう。

“あの人”はもう、そばにいないのだから……

《一章》新しい学校

ボクは今、幸せだと思います。

優しいお父さんにお母さんと頼りになるお兄ちゃん。

とても親切なクラスメートたち。

他にも色々あるけれど一つ一つ言っていたら止まらなくなっちゃうぐらい、ボクは幸せなんだ

あの人がいたから……

けれど、もうあの人はいない

あの人とはこの春から別の高校になる

遥か彼方への存在になってしまう

だからボクは幸せ者のままじゃダメなんだ

あの人みたいに、みんなを守れるだけの男にならなきゃいけないんだ

あの人みたいに、

みんなの笑顔を守れるだけの男にならなきゃいけないんだ……

……

……

…

ピピッピピッピピッ

「うーん、もう朝か……」

目覚ましのアラーム音が響き渡り、ボクの意識は覚醒する。
３０畳もある広い畳の部屋にある布団からもぞもぞと起き上がり時計を見てみた。
今現在の時間は7時5分。
うん、早すぎず遅すぎないいい時間帯だ。

「ユキー、ご飯よー」

「はーい」

とりあえず、今は朝ご飯を食べに行こう。
顔を洗うのは後でいいや。

「ユキー、早くしなさーい」

「分かってるよー」

早く行かないと朝ご飯がなくなりそうだ。

あぁ、そうそう。自己紹介しなきゃだね。

ボクの名前は清涼水優姫(きよすみずゆうき)。
今年から高校生になるフツウの男の子だよ。
まぁ、昔はよく名前や名字でからかわれたりしたけどね……
とりあえず、そんな事は割愛して、
今、ボクはご飯も食べ終わり、素早く新しい学校生活の象徴たるとある私立の詰め襟を着込んで家を出たところだ。
外にはボク以外にもたくさんの学生たちがいる。
多分、ボクたちと同じ新入生たちだろう。
そしてその新入生を祝うかのように、辺りの街頭付近の桜の木から美しい桜の花びらが舞い落ちている。
本当に、綺麗だな……

「よぅ、ユキ。いつも通りなよなよしてんじゃねーよ」

美しい風景から一転して、不覚にもボクは少し気分が落ち込んでしまった。
とりあえずボクは振り返ってその人に挨拶をする。

「あぁ、おはよう美奈ちゃん」

ボクの後ろにいたのは中学の時の同級生、天空美奈(あまそらみな)ちゃんである。
彼女とは中学からこの様な事をいわれ続けているから慣れたつもりだったが……
どうやらちっともなれていないみたいだ。
しかも、

「お前はもう少し“オレ”みたいに男らしくできねーのか？」

不思議な顔をしてボクに説教をする彼女は言葉通り、『男らしい』女の子だ。

しかもケンカは男女トータルで最強レベルの超人的身体能力。
一つ目の男らしさと二人目の強さを合わせればどうなるか想像つくであろう。
そう、彼女は『準スケバン』なのである。
とはいっても別に怒らせなければ彼女はフツウに目つきの悪いカッコいい女子だと思うけど……

「オイ、何ぼうっとしてるんだよ？」

美奈ちゃんがボクの顔を覗き込むにして顔を伺う。
ボクはそれを、「何でもない」とだけ言って歩き始める。
どうでもいい事だけれども、美奈ちゃんは僕より遥かに背が高い。

「ふーん、まぁいっか。」

美奈ちゃんはそう言いながらボクの隣を歩く。
……ボクとしては、美奈ちゃんが隣にいるとより自分が小さく見られるから勘弁してほしいぐらいだ。
そんな風に少し落ち込んでいたら美奈ちゃんがボクに顔を再び近づけてきた。

「なぁ、ユキ。アイツ……元気にやってるかな？」

「……」

美奈ちゃんの言うアイツとは多分、ボクの親友である、あの人の事であろう。
ボクとしては無言を貫きたかったが、あえて答えてみた。

「大丈夫だよ、きっとね。」

ボクは舌を出して小悪魔風に言ってみた。

すると美奈ちゃんは舌打ちを一つしてボクの頭を上から手荒くわしゃわしゃと撫で始めた。

「なっ、なにするんですか！？」

必死に美奈ちゃんの手を振り払いながらボクは彼女に食ってかかる。

対する彼女は悪い目つきのままボクを見下ろして、「ふん、ガキが」とつまらなさそうに言っていた。

けれど、ボクには今の一言は辛かった。

具体的に言うと、天下の往来で地面に手をつくいわゆるｏｒｚポーズになるぐらいに。

「おいおい、なに恥ずかしい事してんだよユキ？」

「誰のせいだと思ってるんですか……」

とりあえずさり気なく差し出された美奈ちゃんの右手を引いて立ち上がり再び歩き出す。

もうすぐ新しい学校につきそうだ。

……あっ、忘れてた。

「美奈ちゃん」

「何だ、ユキ？」

ボクを見下ろしながら美奈ちゃんは静かに続きを待つ。
そんな彼女にボクは一言で言いたいことを伝えた。

「また三年間よろしくね」

彼女は一瞬驚いたような顔を見せたがすぐにいつもの悪い目つきに変わり、彼女も言った。

「あぁ、こちらこそよろしくな」

そうしてボクたちは今、『私立凛陽学院』の校門をくぐった。

いよいよボクは高校生になるんだ。

“あの人”のいない新しい学校生活が、始まろうとしていた。

…2　運命

私立凛陽学院
『バカ高』と呼ばれ、日本内の学力順位は下から三番目という非常に学力が芳しくない高校であらる。
しかしこの高校は学力が劣っている分、部活動が激しく盛んである。
その活躍は数多の新聞やニュースなどのマスコミに取り入れられて世間からは注目の的とされている。
そして何よりも有名なのが、この高校を支援している企業である。

その企業の名前は、『大御神』財閥。
世界中に数多の企業や支部に、あまつさえ政治家を登用し、今現在で最も財力と権力を持つ世界一の大財閥だ。
どうしてその企業がこんな高校を作り上げたのがは分からないが、ここが今日からボクの通う高校である。

「しかし、広いな……」

「うん、そうだね。しかもすごい景色だね……」

ボクと美奈ちゃんはレンガ造りの大きな校門をくぐってキョロキョロと辺りを見ながら感心してしまう。

あたりの目を引く真っ白な校舎に安らぎを与えるかのように広がる緑の木々。
整備されたレンガ造りの道の端には様々な花たちが美しく咲き誇っており、さらには校舎まで続く街頭には一本一本桜の木が立っており、ボクたちを祝福してくれているように感じてしまう。

「キレイだね……」

「あぁ、キレイだな。けどアレにはかなわねーだろ？」

美奈ちゃんの指差した方向に視線を向けると、そこにあったのは……

「おっ、大きい……！！」

ボクは桜街道を抜けてすぐに広がる景色の中でひときわ目立つ、大きな桜の木を見て驚いた。
その木はまるで屋久島にある縄文杉のごとき大きさと存在感を示し、ピンク色の花びらがハラハラと他の木々よりも優雅に舞い散っている。

「なぁユキ、あのぐらいになると樹齢って何年位になるんだろうな？」

「うーん、確か……屋久島の縄文杉が三千年以上だから……」

美奈ちゃんの問いにボクは答えをあみだそうと改めてその桜の木を触れて確認してみようとする。

とりあえず、ボクは木に手を置いた。

その瞬間、

『ズギィィィィ！！』

「ウアァァァァアアアア！！」

急に誰かに心臓を握り潰されたような痛みがボクの体に響き渡り、地面に倒れ込んでしまった。

「ユキ！！どうした！？」

美奈ちゃんが慌ててボクを抱き起こすがボクはそんな事を気にしている余裕がない。

なぜか分からないけど今、ボクは体がおかしくなっている気がする。

体中、熱いし冷たいし痒いし痺れるし死ぬほど痛い。

そして何よりも苦しくて死にそうなぐらいに……悲しい。

「美奈……ちゃん、た…すけ……」

どうしようもない苦しさにボクは美奈ちゃんにしがみつく。

それでもボクの体から痛みや悲しみは抜けていかない。

「オイ、ユキ！！大丈夫か！？今、保健室に連れて行くから少し我

慢しろよ！？」

不意に体が浮くような感覚がしてボクは美奈ちゃんに抱きかかえられる。

そんな中でもボクは余りの苦しさで意識を失おうとしていた。

「美奈ちゃん……イタいよ……悲しいよ……苦しいよ……」

「！！！…クソッたれが！！」

美奈ちゃんは心配そうにボクの顔を覗き込みながら走りだそうとする。

だが、不意に聞こえた声に足を止めた。

「大変そうね、アナタたち。」

「！！」

また体が浮くような感覚がしてすぐに体に衝撃が伝わる。

どうやら美奈ちゃんはボクを抱えたまま大きく後ろに跳躍したみたいだ。

「……テメェ、何者だ……！！」

雰囲気だけで美奈ちゃんが警戒しているのが分かる。

だって小さい頃から武術を学び続けていた美奈ちゃんが背後の気配に気がつかなかった事なんて今まで無かったのだから……

「驚かせたのならごめんなさいね。でも、つい気になっちゃったから話しかけちゃった」

ぼやっと霞む視界でボクはその女の子を確認する。

その女の子はまるで舞い散る桜を付き従えているかのような雰囲気を醸し出し、明らかにただ者ではない事が肌で感じられるぐらいだった。

「良ければ、ワタシがその子を助けてあげるわよ？」

突然の言葉にボクと美奈ちゃんは戸惑った。

だがそんな動揺もつかの間、ボクは余りの苦しさに意識を手放してしまった。

今考えると、ボクの人生が変わったのはここからだと思う。

ボクはこの日にこの女の子と関わってしまったため、知ってしまった。

世界の理不尽さと、強き者たちの苦しみ。

そして、

明日への道しるべを……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6041z/

明日への道しるべ

2011年12月23日02時46分発行